岩手県野田村の支援・交流活動報告（２０１３年 ７月 ２０日）

7 月下旬にもかかわらず、野田村は 20 度を下回る涼しさ。定例の第三土曜日のバス運行は、今回、折悪く弘前大学の火曜授業振替日にあたり、実施が危ぶまれましたが、すでに単位をほぼ取得済みの上級生 9 名の参加があり、ことなきをえました。大学生に加えて、社会人 10 名、ギター弾き語りの原野さんと私の計 21 名での野田村訪問となりました。

活動は、野田中学校仮設住宅集会場でのギター弾き語りと茶話会、野田総合センター児童クラブでの学習支援と遊び、道の駅パープルでのテント物産品販売の 3 種に分かれて行われました。大学生すべてが野田村ボランティア初体験だったこともあり、希望に応じて午前と午後の活動内容を変え、野田村の様々な地域と人に触れてもらうことにしました。

「道の駅おりつめ」にて

野田中学校グランドに立ち並ぶ仮設住宅

野田村に入り、パープルと、児童クラブのある総合センターで、それぞれ活動するメンバーが下車した後、仮設住宅集会場に到着すると、ほぼ定時の 10 時 30 分で、住民の方々が待っていてくれました。いつものコーヒーやお茶を交えての語らいのほか、チラシで告知していたギター弾き語りを楽しみにしていた人が多かったようです。

同道いただいた演奏者は、原野洋さんという弘前市のライヴハウスで活動するシンガーソングライターで、被災地訪問は初めてとのことでした。50 曲以上の自作曲をお持ちで、その一部とカバー曲を、インターネット上の you tube で視聴することができます。事前にチェックして、「夢への階段」、「夢をあきらめないで」（カバー）を気に入っていました。

弾き語りは、原野さんのトークと、住民、ボランティアの語らいとともに、リラックスした雰囲気のなかで行われ、初めはやや硬かった場の空気も次第に和らいでいき、参加者に笑顔が見られ、知っている曲があると一緒に口ずさむようになりました。途中、集会場に歌詞の貼ってあった「ふるさと」と、「今日の日はさようなら」を皆で歌いもしました。大学生ボランティアも、徐々に住民の方々に近づき、打ち解けていった様子でした。

原野さんの弾き語りで、仮設住宅集会場の雰囲気が和やかに

大学生ボランティアとの語らい（祖母と孫のよう）

弾き語りを聴きにいらした住民の方々に尋ねてみたところ、皆さん野田村ご出身で、ボランティアとの会話では、震災前の野田村は、漁業などで比較的豊かで、隣接する久慈市や田野畑村と合併せずに自立してきたことが、誇らしげに語られました。他方、震災後、野田村は中心部が壊滅的な被害を受けたため、経済的に復興できるのか不安だという声も聞かれました。また、居住地により、津波で浸水した家とそうでない家があるところ、仮設住宅に住んでいる家庭は前者で、両者に差が生じてきているという話もありました。

公営住宅は建ち始めているもののいくばくかの家賃がかかり、高台はいまだ造成中で移転と住宅建設に時間もお金もかかることが予想され、仮設住宅を出た後も明るい話ばかりではないかもしれません。とはいえ、プレハブ造りで隣家と薄壁を隔てた仮設住宅は、その名の通り「応急仮設」で、数年間にわたる居住に適しないことは明らかです。私たちの弾き語りと茶話会がもし少しの気休めにでもなれば、と願わずにはいられませんでした。

児童クラブでの活動では、いつも通り、野田村の元気な子どもたちと楽しく遊ぶことができました。大学生ボランティアは、オセロやかるたなどの遊び、隣接する体育館でのサッカーなどのスポーツのほか、肩車やジャンプをせがまれて、翌日は筋肉痛になったとのこと。午後は、原野さんに児童クラブでも弾き語りをしていただき、好評を博しました。

パープルでの物販手伝い、呼び込みや駐車誘導の活動も、無事に進んだようです。海産物や焼き鳥のほか、仮設住宅居住者「グラシアの会」の手芸品等が販売されていました。今回お手伝いしたテントでの物産販売は、7 月中旬から末までの土日祝日に催されるもので、久慈市が舞台の NHK 朝のテレビ小説「あまちゃん」の影響で、野田村にも観光バスが多く立ち寄るようになったことによります。日曜日には「のだ塩ソフト」の店の前に長蛇の列ができるとのことで、以前からは考えられない事態です。また、少し前に「のだ塩」がテレビでとり上げられ、千件ほどの注文が一夜にして舞い込んだそうで、品薄状態がしばらく続くとのこと。「あまちゃん」特需が野田村復興の一助になることが期待されます。

野田村の子どもたちに大人気の齋藤さん

パーブル店頭の「のだ塩」完売

（担当：飯考行）